

令和元年度

健全化判断比率及び
資金不足比率審査意見書

名寄市監査委員

名 監 査 第 1 3 号

令和 2 年 9 月 11 日

名 寄 市 長 加 藤 剛 士 様

名 寄 市 監 査 委 員 鹿 野 裕 二

名 寄 市 監 査 委 員 黒 井 徹

令和元年度名寄市各会計決算に基づく健全化判断比率及び資金不足比率の
審査意見について

地方公共団体の財政の健全化に関する法律第 3 条第 1 項及び第 22 条第 1 項の規定により審査に付された、令和元年度名寄市各会計の決算に基づく健全化判断比率及び資金不足比率並びにその算定の基礎となる事項を記載した書類について審査しましたので、次のとおり意見を提出します。

目 次

| | | |
|---|----------------|---|
| 1 | 審査の対象 | 1 |
| 2 | 審査の期間 | 1 |
| 3 | 審査の方法 | 1 |
| 4 | 審査の結果 | 1 |
| | (1) 健全化判断比率の状況 | |
| | ア 実質赤字比率 | 2 |
| | イ 連結実質赤字比率 | 3 |
| | ウ 実質公債費比率 | 4 |
| | エ 将来負担比率 | 5 |
| | (2) 資金不足比率の状況 | |
| | ア 地方公営企業法適用事業 | 6 |
| | イ 地方公営企業法非適用事業 | 7 |
| 5 | むすび | 7 |

(注) 用語の定義等は特段の定めがある場合を除き、次の法律の定めるところによる。
地方公共団体の財政の健全化に関する法律（平成19年法律第94号）
地方公共団体の財政の健全化に関する法律施行令（平成19年政令第397号）
地方公共団体の財政の健全化に関する法律施行規則（平成20年総務省令第8号）
地方財政法（昭和23年法律第109号）

1 審査の対象

令和元年度決算に基づき算定された健全化判断比率（実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率、将来負担比率）及び資金不足比率並びにその算定の基礎となる事項を記載した書類

健全化判断比率及び資金不足比率の対象となる会計の区分

| 区 分 | | 会計名等 | 比 率 | | | |
|----------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|------------------|
| 一般会計等 | | 一般会計 | ↑ 実質赤字比率 ↓ | ↑ 連結実質赤字比率 ↓ | ↑ 実質公債費比率 ↓ | ↑ 将来負担比率 ↓ |
| | 一般会計等に属する特別会計 | 名寄市立大学特別会計 | | | | |
| 公営事業会計 | 特別会計 | 国民健康保険特別会計(保険事業勘定) | ↑ 連結実質赤字比率 ↓ | ↑ 実質公債費比率 ↓ | ↑ 将来負担比率 ↓ | ↑ 資金不足比率 ↓ |
| | | 国民健康保険特別会計(直診勘定) | | | | |
| | 介護保険特別会計(保険事業勘定) | | | | | |
| | 介護保険特別会計(サービス事業勘定) | | | | | |
| | 後期高齢者医療特別会計 | | | | | |
| 公営企業会計 | 法適用 | 水道事業会計 | ↑ 連結実質赤字比率 ↓ | ↑ 実質公債費比率 ↓ | ↑ 将来負担比率 ↓ | ↑ 資金不足比率 ↓ |
| | | 病院事業会計 | | | | |
| | 法非適用 | 食肉センター事業特別会計 | ↑ 連結実質赤字比率 ↓ | ↑ 実質公債費比率 ↓ | ↑ 将来負担比率 ↓ | ↑ 資金不足比率 ↓ |
| | 下水道事業特別会計 | | | | | |
| | | 個別排水処理施設整備事業特別会計 | ↑ 連結実質赤字比率 ↓ | ↑ 実質公債費比率 ↓ | ↑ 将来負担比率 ↓ | ↑ 資金不足比率 ↓ |
| | | | | | | |
| 一部事務組合等 | | 北海道市町村備荒資金組合 | ↑ 連結実質赤字比率 ↓ | ↑ 実質公債費比率 ↓ | ↑ 将来負担比率 ↓ | ↑ 資金不足比率 ↓ |
| | | 北海道後期高齢者医療広域連合 | | | | |
| | | 名寄地区衛生施設事務組合 | | | | |
| | | 上川北部消防事務組合 ほか | | | | |
| 第三セクター ※ | | — | ↑ 連結実質赤字比率 ↓ | ↑ 実質公債費比率 ↓ | ↑ 将来負担比率 ↓ | ↑ 資金不足比率 ↓ |

※第三セクターのうち、株式会社名寄振興公社は損失補償契約を締結している等の要件に該当しない団体のため、上表に記載していない。

2 審査の期間

令和2年9月3日から同年9月7日まで

3 審査の方法

健全化判断比率及び資金不足比率並びにこれらの算定の基礎となる事項を記載した書類が、関係法令に基づき適正に作成されているかどうかを主眼として、関係書類の照合等を行うとともに、関係部局からの説明を聴取するなどの方法により審査を実施した。

4 審査の結果

審査に付された健全化判断比率及び資金不足比率は、関係法令等に準拠して適正に算定されており、その算定の基礎となる事項を記載した書類とも符合し、正確であると認めた。

(1) 健全化判断比率の状況

健全化判断比率とは、実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率、将来負担比率の4つの財政指標の総称である。これらはいずれも国が示す早期健全化基準を下回っており、財政の健全性が維持されている範囲にあると認められる。

第1表 健全化判断比率 (単位：%)

| 健全化判断比率 | 参 考 | | | |
|-----------------|-------|---------|--------|--------|
| | 令和元年度 | 早期健全化基準 | 平成30年度 | 平成29年度 |
| 実 質 赤 字 比 率 | — | 13.01 | — | — |
| 連 結 実 質 赤 字 比 率 | — | 18.01 | — | — |
| 実 質 公 債 費 比 率 | 9.2 | 25.00 | 8.5 | 8.4 |
| 将 来 負 担 比 率 | 26.3 | 350.00 | 31.6 | 33.8 |

注① 比率は、小数点以下第2位又は第3位を切り捨てて表示している。

② 実質赤字額又は連結実質赤字額がない場合及び実質公債費比率又は将来負担比率が算定されない場合は、「—」で表示している。

ア 実質赤字比率

令和元年度の実質赤字比率は、実質赤字額がないため比率は算定されていない。

第2表 実質赤字比率の算定と年度比較 (単位：千円・%)

| 区 分 | 実質収支額等 | | | 増 減 ①-② |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|
| | 令和元年度 ① | 平成30年度 ② | 平成29年度 | |
| 一般会計等実質収支額 | 371,676 | 352,431 | 478,192 | 19,245 |
| 実質赤字額 A (注1) | — (△371,676) | — (△352,431) | — (△478,192) | — (△19,245) |
| 標準財政規模 B | 12,428,524 | 12,313,203 | 12,313,932 | 115,321 |
| 実質赤字比率 A/B (注2) | — (△ 2.99) | — (△ 2.86) | — (△ 3.88) | — (△ 0.13) |

※ 表中の△(負の値)表示は、黒字である財政状況を示している。

注1：一般会計及び特別会計のうち普通会計に相当する会計における実質赤字の額

実質赤字の額＝繰上充用額＋支払繰延額＋事業繰越額-(歳計剰余額＋繰越に係る未収入特定財源)

注2：比率は、小数点以下第2位又は第3位を切り捨てて表示している。

注1, 2：()は参考までに算定結果を示したものの。

| |
|---|
| $\text{実質赤字比率} = \frac{\text{一般会計等の実質赤字額}}{\text{標準財政規模}} \times 100$ |
|---|

イ 連結実質赤字比率

令和元年度の連結実質赤字比率は、連結実質赤字額がないため比率は算定されていない。

特別会計のうち国民健康保険特別会計(直診勘定)、後期高齢者医療特別会計、介護保険特別会計(サービス事業勘定)及び公営企業法非適用企業の食肉センター特別会計は歳入歳出差引額0円となったため、記載を省略した。

第3表 連結実質赤字比率の算定と年度比較 (単位：千円・%)

| 区 分 | 実質収支額等 | | | 増 減 ①-② |
|-------------------------|----------------|----------------|----------------|---------------|
| | 令和元年度 ① | 平成30年度 ② | 平成29年度 | |
| 一般会計等(名寄市立大学特別会計を含む) | 371,676 | 352,431 | 478,192 | 19,245 |
| 特 別 会 計 | 93,168 | 92,071 | 99,531 | 1,097 |
| 国民健康保険特別会計 (保険事業勘定) | 33,582 | 41,066 | 50,055 | △ 7,484 |
| 介護保険特別会計 (保険事業勘定) | 59,586 | 51,005 | 49,476 | 8,581 |
| 公営企業会計(地方公営企業法適用企業) | 1,220,410 | 1,123,173 | 1,034,216 | 97,237 |
| 水道事業会計 | 415,844 | 395,105 | 417,804 | 20,739 |
| 病院事業会計 | 804,566 | 728,068 | 616,412 | 76,498 |
| 特別会計(地方公営企業法非適用企業) (注1) | 31,303 | 0 | 0 | 31,303 |
| 下水道事業特別会計 | 24,944 | 0 | 0 | 24,944 |
| 個別排水処理施設整備事業特別会計 | 6,359 | 0 | 0 | 6,359 |
| 合 計 | 1,716,557 | 1,567,675 | 1,611,939 | 148,882 |
| 連結実質赤字額 A | △ 1,716,557 | △ 1,567,675 | △ 1,611,939 | △ 148,882 |
| 標準財政規模 B | 12,428,524 | 12,313,203 | 12,313,932 | 115,321 |
| 連結実質赤字比率 A/B (注2) | — (△ 13.81) | — (△ 12.73) | — (△ 13.09) | — (△ 1.08) |

※ 連結実質赤字額の△(負の値)表示は、黒字である財政状況を示している。

注1：特別会計のうち地方公営企業法非適用企業である下水道事業及び個別排水処理施設整備事業は、令和2年度から地方公営企業法適用となり企業会計に移行することにより、両特別会計は令和2年3月31日で打ち切り決算となったことから剰余金が生じた。

$$\text{連結実質赤字比率} = \frac{\text{連結実質赤字額}}{\text{標準財政規模}} \times 100$$

連結実質赤字額はイとロの合計額がハとニの合計額を超える場合の当該超える額

- イ 一般会計及び公営企業(地方公営企業法適用企業・非適用企業)以外の特別会計のうち、実質赤字を生じた会計の実質赤字の合計額
- ロ 公営企業の特別会計のうち、資金の不足額を生じた会計の資金の不足額の合計額
- ハ 一般会計及び公営企業会計以外の特別会計のうち、実質黒字を生じた会計の実質黒字の合計額
- ニ 公営企業の特別会計のうち、資金の剰余額を生じた会計の資金の剰余額の合計額

注2：連結実質赤字比率は、小数点以下第3位を切り捨てて表示している。

注2：() は参考までに算定結果を示したものの。

ウ 実質公債費比率

令和元年度の実質公債費比率(3カ年平均)は9.2%となり、早期健全化基準25.0%(第1表参照)を下回っている。

第4表 実質公債費比率の算定と年度比較 (単位：千円・%)

| 区 分 | 令和元年度 ① | 平成30年度 ② | 平成29年度 | 増 減 ①-② |
|--|------------|-------------|------------|------------|
| 地方債の元利償還金 A | 2,544,537 | 2,345,654 | 2,253,538 | 198,883 |
| 準元利償還金 B | 1,010,442 | 998,009 | 1,134,404 | 12,433 |
| 公営企業に要する経費の財源とする地方債の償還の財源に充てたと認められる繰入金 | 989,707 | 974,600 | 988,821 | 15,107 |
| 一部事務組合等の起こした地方債に充てたと認められる補助金又は負担金 | 6,002 | 5,987 | 111,760 | 15 |
| 公債費に準ずる債務負担行為に係るもの | 14,614 | 17,224 | 33,728 | △ 2,610 |
| 一時借入金の利子 | 119 | 198 | 95 | △ 79 |
| 特定財源 C | 344,505 | 342,071 | 305,846 | 2,434 |
| 貸付金の財源として発行した地方債に係る貸付金の元利償還金 | 50,674 | 50,083 | 13,240 | 591 |
| 公営住宅使用料 | 112,411 | 120,895 | 116,909 | △ 8,484 |
| 都市計画事業の財源として発行された地方債償還額に充当した都市計画税 | 128,003 | 119,338 | 125,597 | 8,665 |
| その他 | 53,417 | 51,755 | 50,100 | 1,662 |
| 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額 D | 2,235,029 | 2,125,864 | 2,118,203 | 109,165 |
| 標準財政規模 E | 12,428,524 | 12,313,203 | 12,313,932 | 115,321 |
| 分子 (A+B)-(C+D) | 975,445 | 875,728 | 963,893 | 99,717 |
| 分母 (E-D) | 10,193,495 | 10,187,339 | 10,195,729 | 6,156 |
| 実質公債費比率(単年度) (A+B)-(C+D)/(E-D) | 9.56929 | 8.59624 | 9.45389 | 0.97305 |
| 実質公債費比率(3カ年平均) (注1) | 9.2 | 8.5 | 8.4 | 0.7 |

注1：小数点以下第2位を切り捨てて表示している。

$$\text{実質公債費比率} = \frac{(\text{地方債の元利償還金} + \text{準元利償還金}) - (\text{特定財源} + \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額})}{\text{標準財政規模} - \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額}} \times 100$$

- ・準元利償還金：イからホまでの合計額
- イ 満期一括償還地方債について、償還期間を30年とすると元金均等年賦償還とした場合における1年当たりの元金償還金相当額
- ロ 一般会計等から一般会計等以外の特別会計への繰出金のうち、公営企業債の償還の財源に充てたと認められるもの
- ハ 組合・地方開発事業団(組合等)への負担金・補助金のうち、組合等が起こした地方債の償還の財源に充てたと認められるもの
- ニ 債務負担行為に基づく支出のうち公債費に準ずるもの
- ホ 一時借入金の利子

エ 将来負担比率

令和元年度の将来負担比率は26.3%であり、早期健全化基準350.0%（第1表参照）を下回っている。

第5表 将来負担比率の算定と年度比較 (単位：千円・%)

| 区 分 | | 令和元年度 ① | 平成30年度 ② | 平成29年度 | 増 減 ①-② |
|-----------------------------|-------------------|------------|-------------|-------------|-------------|
| 将来負担額 | 地方債の現在高 イ | 27,703,941 | 28,688,707 | 28,852,196 | △ 984,766 |
| | 債務負担行為に基づく支出予定額 ロ | 140,348 | 26,222 | 37,092 | 114,126 |
| | 公営企業債等繰入見込額 ハ | 7,160,563 | 7,754,810 | 8,140,074 | △ 594,247 |
| | 組合負担等見込額 ニ | 0 | 6,002 | 11,983 | △ 6,002 |
| | 退職手当負担見込額 ホ | 960,390 | 1,107,180 | 1,361,681 | △ 146,790 |
| | 設立法人の負債額等負担見込額 ヘ | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 土地開発公社 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 第三セクター等 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 連結実質赤字額 ト | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 組合連結実質赤字負担見込額 チ | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 合 計 A | 35,965,242 | 37,582,921 | 38,403,026 | △ 1,617,679 | |
| 充当可能財源等 | 充当可能基金額 | 8,419,920 | 8,390,084 | 8,466,745 | 29,836 |
| | 充当可能特定歳入額 | 3,174,811 | 3,275,022 | 3,664,001 | △ 100,211 |
| | うち都市計画税 | 861,368 | 841,293 | 961,701 | 20,075 |
| | 基準財政需要額算入見込額 | 21,681,032 | 22,697,440 | 22,824,553 | △ 1,016,408 |
| 合 計 B | 33,275,763 | 34,362,546 | 34,955,299 | △ 1,086,783 | |
| 充当後将来負担額 A-B | 2,689,479 | 3,220,375 | 3,447,727 | △ 530,896 | |
| 標準財政規模 C | 12,428,524 | 12,313,203 | 12,313,932 | 115,321 | |
| 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額 D | 2,235,029 | 2,125,864 | 2,118,203 | 109,165 | |
| 調整後標準財政規模 C-D | 10,193,495 | 10,187,339 | 10,195,729 | 6,156 | |
| 将来負担比率 (A-B)/(C-D) (注1) | 26.3 | 31.6 | 33.8 | △ 5.3 | |

注1：小数点以下第2位又は第3位を切り捨てて表示している。

$$\text{将来負担比率} = \frac{\text{将来負担額} - (\text{充当可能基金額} + \text{特定財源見込額} + \text{地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額})}{\text{標準財政規模} - \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る基準財政需要額算入額}} \times 100$$

・将来負担額：イからチまでの合計額

- イ 一般会計等の当該年度の前年度末における地方債現在高
- ロ 債務負担行為に基づく支出予定額(地方財政法第5条各号の経費に係るもの)
- ハ 一般会計等以外の会計の地方債の元金償還に充てる一般会計等からの繰入見込額
- ニ 当該団体が加入する組合等の地方債の元金償還に充てる当該団体からの負担等見込額
- ホ 退職手当支給予定額(全職員に対する期末要支給額)のうち、一般会計等の負担見込額

- へ 地方公共団体が設立した一定の法人の負債の額、その者のために債務を負担している場合の当該債務の額のうち、当該法人等の財務・経営状況を勘案した一般会計等の負担見込額
- ト 連結実質赤字額
- チ 組合等の連結実質赤字額相当額のうち一般会計等の負担見込額
- ・ 充当可能基金額：イからへまでの償還額等に充てることができる地方自治法第241条の基金

(2) 資金不足比率の状況

令和元年度決算において、いずれの会計も資金不足額が発生していないため（第3表参照）比率は算定されていない。

第6表 資金不足比率 (単位：%)

| 会計名 | | 令和元年度(注1) | 経営健全化基準(注2) |
|----------|------------------|-----------|-------------|
| 公営企業法適用 | 水道事業会計 | — | 20.0 |
| | 病院事業会計 | — | 20.0 |
| 公営企業法非適用 | 食肉センター事業特別会計 | — | 20.0 |
| | 下水道事業特別会計 | — | 20.0 |
| | 個別排水処理施設整備事業特別会計 | — | 20.0 |

注1：資金不足がない場合は、「—」で表示している。

注2：経営健全化基準は早期健全化基準に相当する基準で地方債協議・許可制度における許可制移行基準を勘案して20%とされている。

ア 地方公営企業法適用事業

水道事業会計及び病院事業会計はともに資金不足額はない。
経営健全化基準である20.0%を両会計ともに下回っている。

(ア) 水道事業会計

第7表 資金不足比率の算定と年度比較 (単位：千円・%)

| 区分 | 令和元年度 ① | 平成30年度 ② | 平成29年度 | 増減 ①-② |
|------------------------------------|---------------|---------------|---------------|------------|
| 流動負債 A(注1) | 39,232 | 61,502 | 60,094 | △ 22,270 |
| 建設改良費等以外の経費の財源に充てるために起こした地方債の現在高 B | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 流動資産 C | 455,076 | 456,607 | 477,898 | △ 1,531 |
| 解消可能資金不足額 D | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 資金の不足額 (A+B-C)-D ③(注2) | △ 415,844 | △ 395,105 | △ 417,804 | △ 20,739 |
| 営業収益 E | 591,454 | 548,502 | 548,695 | 42,952 |
| 受託工事収益 F | 97 | 40 | 171 | 57 |
| 事業の規模 (E-F) ④ | 591,357 | 548,462 | 548,524 | 42,895 |
| 資金不足比率 ③/④(注3) | — (△ 70.3) | — (△ 72.0) | — (△ 76.1) | — (1.7) |

注1：流動負債合計額から建設改良の財源に充てるための企業債・長期借入金を控除した額である。

注2：資金不足がない場合は△（負の値）となる。

注3：（ ）は参考までに算定結果を示したもの。

(イ) 病院事業会計

第8表

資金不足比率の算定と年度比較

(単位：千円・%)

| 区 分 | | 令和元年度 ① | 平成30年度 ② | 平成29年度 | 増 減 ①-② |
|--------------------------------------|----------|------------|-------------|-----------|------------|
| 流動負債 | A (注1) | 1,108,325 | 1,373,143 | 1,113,548 | △ 264,818 |
| 建設改良費等以外の経費の財源に充てる ために起こした地方債の現在高 | B | 87,985 | 102,880 | 117,265 | △ 14,895 |
| 流動資産 | C | 2,000,876 | 2,204,091 | 1,847,225 | △ 203,215 |
| 解消可能資金不足額 | D | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 資金の不足額 (A+B-C)-D ③ (注2) | ③ (注2) | △ 804,566 | △ 728,068 | △ 616,412 | △ 76,498 |
| 営業収益 (医業収益) | E | 9,445,361 | 9,385,682 | 9,158,270 | 59,679 |
| 受託工事収益 | F | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 事業の規模 (E-F) ④ | ④ | 9,445,361 | 9,385,682 | 9,158,270 | 59,679 |
| 資金不足比率 ③/④ (注3) | ③/④ (注3) | (△ 8.5) | (△ 7.7) | (△ 6.7) | (△ 0.8) |

注1：流動負債合計額から建設改良の財源に充てるための企業債・長期借入金を控除した額である。

注2：資金不足がない場合は△（負の値）となる。

注3：（ ）は参考までに算定結果を示したものの。

イ 地方公営企業法非適用事業

食肉センター事業特別会計は、一般会計からの繰入金で調整を行ったため歳入歳出差引額は0円となった。

下水道事業特別会計及び個別排水処理施設整備事業特別会計は令和2年度から地方公営企業会計への移行に伴い、令和2年3月31日をもって打ち切り決算となった。歳入歳出差引額は下水道事業特別会計では2,494万4,476円、個別排水処理施設整備事業特別会計では635万9,544円となり、いずれも黒字であった。各会計とも資金不足は生じていない。

$$\text{資金不足比率} = \frac{\text{資金の不足額}}{\text{事業の規模}} \times 100$$

・資金の不足額

資金の不足額(法適用企業) = (流動負債+建設改良費等以外の経費の財源に充てるために起こした地方債の現在高-流動資産) - 解消可能資金不足額

資金の不足額(法非適用企業) = (繰上充用額+支払繰延額・事業繰越額+建設改良費等以外の経費の財源に充てるために起こした地方債現在高) - 解消可能資金不足額

解消可能資金不足額：事業の性質上、事業開始後の一定期間構造的に生じる資金の不足額がある場合において、資金の不足額から控除する一定の額。

・事業の規模

事業の規模(法適用企業) = 営業収益の額-受託工事収益の額

事業の規模(法非適用企業) = 事業収益に相当する収入の額-受託工事収益に相当する収入の額

指定管理者制度(利用料金制)を導入している公営企業については、営業収益の額に関する特例がある。

5 むすび

名寄市は人口減少や所在企業の移転・再編など今後、市民生活に大きく影響を及ぼすであろう課題に直面している。財政課題に置き換えると歳入面では、市税等の一般財源の大幅な伸びを期待することは困難である一方、歳出面では高齢化の進展による社会保障関係費の伸長や公共施設の老朽化対策などによる財政需要の増大が見込まれる。

地域の経済・社会状況の変化に対応して中長期的な視点に立った持続可能な財政運営に努められたい。